

三省堂『明解国語総合』 を使用して

——実業校の実態に即した使い易さ、
わかり易さを実感

石川孝邦

本校においては、平成十九年度は三省堂の『明解国語総合』を総合学科の一年生に使用した。本校では平成十九年度までは総合学科はくくり募集を実施していないので、各系列に分かれる前の、いろいろな進路を志望する生徒たちの集まるクラスである。本校の総合学科の門を叩いた生徒たちの多くに共通している点は、学習嫌いだということである。文部省（現文科省）が提唱した「ゆとり教育」は結果として学力の二極化を生んだように思われる。

「ゆとり教育」に満足できない親たちは小学校の低学年より学習塾に通わせ、また公立の小学校では満足できずに私立の小学校に入学させようといわば「お受験」をさせて、より高度な教育を受けさせようとする。

中学校を経て高校に入学するころには学力の格差は非常に大きなものになって

いる。ここ北九州の地の「ゆとり教育世代」のいわゆる勝ち組たちは県外の難関私立高校が県立の上位校へと歩を進めていく。そのような中で本校の総合学科に入学してくる生徒たちはそれとは異なる。したがって入学時の学力はそれほど高くはない。しかし、能力がないというわけではない。私が思うに「ゆとり教育」の結果、学習の方法を知らないだけなのである。磨けば光る原石たちもその中には多くいる。だから時間をかけてしっかりと磨いていけば飛躍的にその能力を伸ばしていく者たちも多いのだ。そのような本校総合学科の現況にしっかりと馴染む教科書が三省堂の『明解国語総合』であった。入学したばかりの生徒たちにはいきなり高度な内容を持ち込んで本校では拒絶反応を起こすだけである。導入の教材として「希望」「一瞬を生きる」は本場に適当な教材と思う。特に「一瞬を生きる」はその最も主題の部分が最後にあるので生徒たちはぐっとその世界に入り込んでいくように思う。また入っていきやすい内容でもある。さらに、教科書が大判なので書き込みができるスペースがたくさんある。本校生徒は入学時ではまだ工夫して自分独自のノートを作成する方法を知らない。したがって教師の板書をただ書き写すだけである。それは内容を本当に理解するのは難しい。しか

し、教科書に書き込みのスペースが多くあるので、直接内容に即したエピソードや大切な部分の説明をメモ的に書き込むことができる。そしてより詳しく板書し、ノートに書き写させるのである。この反復がよ

り生徒の理解度を深めていくのである。また、教師の側から言っても板書計画や授業内容を書き込めるスペースがあることは非常に便利でありがたい。

古典分野においては、それぞれの単元の後に文法内容を設けてあるのがよい。本校総合学科では、独立して古典文法の内容を割くことはできない。だから、単元の後にある文法内容が頼りなのである。その構成や内容が本場にわかりやすくよいのである。さらに漢文分野の内容についても、特に漢詩の形式の説明などは少ないスペースに必要不可欠なポイントがきちんとまとめられており、生徒の理解度も高かった。また、挿絵や写真の挿入のしかたも的を得ていて非常によい。

文部省も文科省となり「ゆとり教育」に対して見直しを余儀なくされているようである。そのような中でこの三省堂の『明解国語総合』は一石を投じた一冊であることにまちがいはないものと思う。

いしかわ たかくに 真颯館高等学校

(福岡県) 教諭で豊前小倉清水寺住職。